



Title	存在論的恐怖が集団成員への利他行動に及ぼす影響 : 集団同一視・集団透過性に着目して
Author(s)	古橋, 健悟; 五十嵐, 祐
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 71-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

存在論的恐怖が集団成員への利他行動に及ぼす影響

—集団同一視・集団透過性に着目して—

古橋 健悟(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

五十嵐 祐(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

集団においては他成員に対して利他的に振る舞うことが望ましく、人々が利他的に振る舞うことができるような集団環境を検討することが重要である。先行研究では、集団同一視が高いほど集団成員に対して利他行動を多く行うことが示されている。本研究では、集団同一視が低い成員は、存在論的恐怖(死の恐怖)が生じた際、集団透過性(集団境界の透過可能性)が低い場合において利他的に振る舞うようになる可能性を検討した。質問紙実験の結果、集団同一視および集団透過性が低い場合に存在論的恐怖が顕現化すると、顕現化しない場合よりも利他行動の提供意図が高くなることが示された。したがって、集団同一視が低い成員は集団から離脱することが難しい場合に限り、存在論的恐怖への対処として利他的に振る舞うという戦略を採用している可能性が示された。

キーワード: 利他行動、存在論的恐怖、集団同一視、集団透過性

問題

われわれが集団生活を営む上で、利他行動は特に重要である。なぜなら、ヒト社会は他者との協力や助け合いの関係に支えられているからである(山本, 2011)。しかし、同一の集団に所属する成員が、常に同一のレベルの利他行動を他成員に対して示すわけではなく、利他行動の促進要因を解明することが求められている。本研究では、集団内における利他行動を促進する要因として、集団同一視と存在論的恐怖(自己の生が有限であるという恐怖)を取り上げ、集団透過性による調整効果を踏まえて検討を行う。

集団同一視と利他行動

一般に、集団同一視は利他行動と正の関連を示す。例えば、他者が自分と同一の社会的カテゴリに所属することを知覚しているほど、協力行動が促進される(e.g., Brewer & Kramer, 1986; Tyler & Blander, 2001)。また、対象者と同じ大学、または異なる大学に所属するインタビュアーへの協力行動を検討した研究では、同じ大学に所属するインタビュアーに対してより協力的になることが示されている(Nier et al., 2001)。さらに、集団同一視を実験的に操作した研究では、大学への同一視が高くなるように操作された場合、大学に対する寄付を行う者の割合が高くなることが示されている(De Cremer & Van Vugt, 1999)。

存在論的恐怖と利他行動

存在論的恐怖は、存在脅威管理理論(Terror Management Theory; Greenberg, Pyszynski, & Solomon, 1986)において検討されている。この理論では、自尊心とその基盤となる文化的世界観(ある集団の中で共有されている信念体系)が存在論的恐怖を緩

衝する装置として機能すると仮定される(脇本, 2005)。この理論に基づいて、存在論的恐怖が顕現化した際の行動や認知についてさまざまな研究が行われている(e.g., Goldenberg, McCoy, Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2000; Rosenblatt, Greenberg, Solomon, Pyszczynski & Lyon, 1989)。

存在論的恐怖は利他行動の促進をもたらす。Tremayne & Curtis(2007)は、囚人のジレンマゲームを用いて、存在論的恐怖が利他行動に及ぼす影響を検討した。その結果、利他行動の受益者が内集団成員であるか外集団成員であるかにかかわらず、向社会的な価値観を持つ個人は存在論的恐怖の顕現化によって利他行動を多く行うようになることが示されている。なお、本研究では集団透過性の調整効果に着目した検討を行うため、個人の特性である向社会的な価値観は取り扱わない。

存在論的恐怖と集団透過性

存在論的恐怖が利他行動に与える影響の調整要因として、集団透過性が挙げられる。集団透過性とは、集団への加入・集団からの離脱の容易さに関する集団の特性であり、加入・離脱が容易な高透過性の集団(e.g., 政党)と、加入・離脱が難しい低透過性の集団(e.g., 家族)が存在する(Lickel et al., 2000)。

Dechesne, Janssen, & Knippenberg(2000)は、存在論的恐怖と集団透過性が集団同一視に及ぼす影響を検討した。実験では、架空の新聞記事により所属大学の集団透過性を操作した。具体的には、高集団透過性条件では「大学変更には個人的な問題がほとんど伴わない」、「多くの学生は大学選択の結果を過大評価している」といった内容の記事、低集団透過性条件では

「大学変更には多くの問題が伴う」、「多くの学生は大学選択の結果を過小評価している」といった内容の記事を参加者に呈示した。その後、存在論的恐怖の有無を操作し、大学への批判的意見に対する評価および大学への帰属感が測定された。分析の結果、集団透過性と存在論的恐怖の交互作用効果がみられ、存在論的恐怖が顕現化すると、低集団透過性条件では高集団透過性条件よりも批判的意見に対する評価が低くなることが示された。この結果は、存在論的恐怖が顕現化した際の対処行動として、集団透過性が低い場合には、その集団を見捨てることができず同一視を行うという戦略が選択されたため生じたと解釈される。

この知見を踏まえると、集団同一視が低い成員であっても、存在論的恐怖が顕現化した際には、離脱が難しい集団に対しては同一視を高めることが考えられる。先の集団同一視と利他行動との関連(e.g., Brewer & Kramer, 1986)を踏まえると、集団透過性が低い集団において存在論的恐怖が顕現化すると、集団同一視が低い成員であっても、他成員に対する利他行動の提供意図が高くなると考えられる。なお、集団同一視が高い成員については、先に述べたように集団同一視と利他行動に正の関連がある(e.g., Brewer & Kramer, 1986)ことから、集団透過性・存在論的恐怖の操作にかかわらず、集団同一視の低い成員よりも利他行動の提供意図が高くなると考えられる。以上より、本研究では以下の2つの仮説を検討する。

仮説 1 集団同一視の高い成員は、集団透過性・存在論的恐怖の操作にかかわらず、他成員への利他行動の提供意図が高い。

仮説 2 透過性の低い集団で存在論的恐怖が顕現化すると、集団同一視の低い成員は、他成員への利他行動の提供意図を高める。

方法

参加者

大学生 225 名にオンライン調査サービス (Qualtrics) 上で実験を行い、回答不備などを除いた 221 名 (男性 109 名、女性 112 名、 $M_{age} = 18.83$, $SD = 1.24$) のデータを以降の分析対象とした。

手続き

実験では、はじめに集団同一視の測定を行った後、集団透過性→存在論的恐怖の順で操作を行った。その後、遅延課題を行い、最後に利他行動の提供意図を測定した。

集団同一視の測定 Karasawa(1991)の集団アイデンティティ尺度 (7 項目 7 件法) を用いた。項目は

「自分がこの大学の学生だということを実感することがありますか」、「あなたは自己紹介の時に、この大学の名を出しますか」などが含まれていた。

集団透過性の操作 Dechesne et al.(2000)の手続きに基づいて、大学選択に関する新聞記事を提示して集団透過性を操作した。高集団透過性条件では、「大学選択は実質、簡単に覆すことができるものである」、「大学を変える際には、たいていの場合、個人的な困難はほとんど伴わない」、「多くの学生は、大学選択がその後にもたらす結果を過大評価している」という内容の記事を提示した。一方、低集団透過性条件では、「大学選択は実質、覆すことができないものである」、「大学を変える際にはたいていの場合個人的な困難が多く伴う」、「多くの学生は、大学選択がその後にもたらす結果を過小評価している」という内容の記事を提示した。また、操作チェック項目として、「私にとって、大学を変更することは難しいことだ」という項目への回答を求めた(6 件法)。なお、ファイラー項目として、「私は大学を変更しても学業成績を維持できると思う」、「私はこの新聞記事の内容は多くの大学に当てはまると思う」、「私は政府の大学政策に問題があると思う」の3項目への回答を求めた。

存在論的恐怖の操作 脇本(2009)に基づいて操作を行った。存在論的恐怖条件では、「すべての計画や活動が中止となるから、死は私にとって脅威である」、「思考能力がなくなってしまうから、死は私にとって脅威である」などの 20 項目について 6 件法での回答を求めた。一方、統制条件では、余暇における活動として、「一日中寝ている」、「ドライブをする」などの 20 項目について 6 件法での回答を求めた。

遅延課題 存在論的恐怖の影響は、顕現化から一定の遅延時間の後に現れる(Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Simon, & Breus, 1994)。そのため本研究では、存在論的恐怖の顕現化の操作を行った後に遅延課題を行った。遅延課題としては単語探索パズルや感情の測定がよく用いられる(脇本, 2005)。そこで本研究では、単語探索パズルを遅延課題として用いた。具体的には、無作為に縦 8 文字・横 13 文字ずつ並べられた 104 文字のひらがなを呈示し、その中から、意味を持つ単語を 3 つ探索する課題を行った。この課題の実施時間は平均 55.09 秒($SD = 30.25$) であった。

利他行動の提供意図 久田・千田・箕口(1989)の学生用ソーシャルサポート尺度を改変して用いた(16 項目 4 件法)。項目は「私は、大学の友人が落ち込んでいると元気づける」、「私は、大学の友人が失恋したと知ったら、心から同情してあげる」などであった。

Table 1 集団同一視、集団透過性の操作、存在論的恐怖の操作、利他行動の提供意図の平均値・標準偏差・ α 係数および変数間の相関係数

	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	α	1	2	3
1. Group identity	4.26	(0.93)	.71	—		
2. Group permeability (high = 0.5, low = -0.5)	0.00	(0.50)	—	-.09	—	
3. Mortality salience (threat = 0.5, control = -0.5)	-0.09	(0.49)	—	.04	.06	—
4. Intention of altruistic behavior	3.05	(0.44)	.90	.32 ***	-.04	.06

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 2 利他行動の提供意図を予測変数とする階層的重回帰分析の結果

	Step 1	Step 2	Step 3
Group identity	.32 ***	.32 ***	.36 ***
Group permeability	-.01	.00	-.01
Mortality salience	.04	.05	.06
Group identity × group permeability		-.07	-.06
Group identity × mortality salience		-.13 *	-.11
Group permeability × mortality salience		-.11	-.12
Group identity × group permeability × mortality salience			.16 *
Adjusted R^2	.09 ***	.11 ***	.13 ***
Δ Adjusted R^2		.02	.02 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表中の値は標準偏回帰係数 (β)

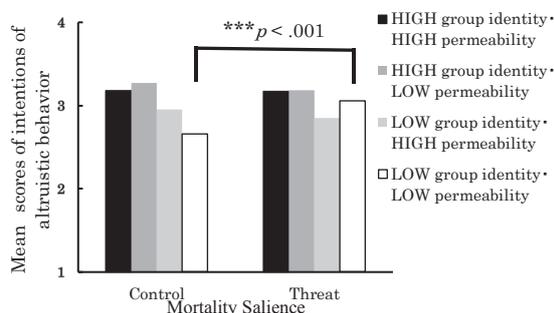


Figure 1 単純傾斜分析の結果

結果

記述統計

各変数の平均値、標準偏差、 α 係数および各変数間の相関係数を Table 1 に示す。各条件の人数は、高集団透過性・存在論的恐怖条件が 48 名、低集団透過性・存在論的恐怖条件が 42 名、高集団透過性・統制条件が 62 名、低集団透過性・統制条件が 69 名であった。

集団透過性の操作チェック

集団透過性の操作(高・低)を独立変数、操作チェックにおける「私にとって、大学を変更することは難しいことだ」の項目得点を従属変数とする対応のない t 検定を行った結果、低透過性条件の参加者は、高集団透過性条件の参加者よりも大学変更が難しいと感じていた ($t(211.74) = 4.04, p < .001, d = .54$)。したがって、集団透

過性の操作は成功していたといえる。

仮説の検討

仮説の検討を行うため、利他行動の提供意図を予測変数、集団同一視、集団透過性、存在論的恐怖を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。Step 1 ではそれぞれの説明変数の主効果、Step 2 では 2 変数の交互作用項、Step 3 では 3 変数の交互作用項を説明変数として投入した(Table 2)。以降では Step 3 の結果について報告する。

まず、集団同一視の主効果が有意であり、集団同一視は利他行動の提供意図と正の関連を持つことが示された。したがって、仮説 1 は支持された。

また、集団同一視×集団透過性×存在論的恐怖の交互作用項の効果が有意であった。単純傾斜分析の結果(Figure 1)、低集団透過性条件において集団同一視が低い(-1SD)場合、存在論的恐怖の傾きが有意であった ($\beta = .46, t(212) = 3.47, p < .001, d = .23$)。すなわち、集団同一視および集団透過性が低い場合に存在論的恐怖が顕現化すると、顕現化しない場合よりも利他行動の提供意図が高まることが示され、仮説 2 は支持された。

考察

本研究では、集団同一視が利他行動の提供意図を高める影響に加え、集団同一視の低い成員が利他行動の提供意図を高めるかどうかについて、集団透過性との関

連から検討を行った。実験の結果、仮説 1 と仮説 2 が支持された。このことは、集団同一視が高い成員は利他行動の提供意図が高い一方、集団同一視が低い成員は集団から離脱することが難しい場合に限り、存在論的恐怖が生じた際に利他行動の提供意図を高めるといふ戦略を採用していることを示唆する。

この結果が生じるメカニズムとして、集団で共有されている信念体系である文化的世界観を支持する行動による存在論的恐怖の緩衝が、集団透過性の低い集団において強く生じることが考えられる。すなわち、存在論的恐怖が生じた際には、その恐怖を緩衝するために文化的世界観を維持する必要がある。この時、もともと文化を同一視しておらず利他的に振る舞っていないとしても、その文化からの離脱が難しい場合には、その文化を維持するために利他的に振る舞うという戦略が採用されると考えられる。

本研究の結果は、死の恐怖が生じる状況における人々の振る舞い方を予測する一助となると考えられる。例えば、自然災害等の危機的状況においては、離脱が難しい内集団の成員に対してより利他的に振る舞うことが示唆される。したがって、離脱することが難しい風土・制度をもつ集団に所属することは、個人が危機的状況において援助を得る上で有用であると考えられる。また、このことは死の恐怖が生じる状況においてヒトが採用してきた生存戦略について示唆している可能性がある。すなわち、集団同一視が低い成員であっても、自然災害等の危機的状況においては離脱が難しい集団内で利他的にふるまうことで、その危機的状況を乗り越えてきた可能性がある。この点に関しては、現実場面における危機的状況に着目した検討や進化心理学的アプローチによる検討といったさらなる検討を行って精査する必要がある。

最後に、本研究の限界および今後の課題について述べる。第 1 に、階層的重帰帰分析における自由度調整済み決定係数が小さいことが挙げられる。また、3 要因の交互作用項を加えたことによる自由度調整済み決定係数の増加量については、有意ではあるものの大きいとはいえない。したがって、利他行動の提供意図を予測する変数として、存在論的恐怖・集団同一視・集団透過性以外の変数に関しても検討する必要がある。第 2 に、存在論的恐怖・集団透過性の操作を行った後、集団同一視を測定していないことが挙げられる。本研究では、集団からの離脱が難しい集団において、存在論的恐怖によって集団同一視が低い成員の集団同一視が高まり、それによって集団内での利他行動の意図が高まると仮定されている。本研究の結果はこの仮定を支持しているものの、操作後の集団同一視を測定していないため、プロセスを詳細に検討することができない。したがって、操作の事前・事後

の両時点において集団同一視を測定し、利他行動の意図が高まるプロセスを明らかにする必要がある。第 3 に、本研究の利他行動の指標は、自己報告式の尺度により測定された提供意図にとどまっており、行動的側面にまで結果を一般化することができない。今後は実験室実験などによって、実際の利他行動を指標とした検討が必要である。第 4 に、本研究では存在論的恐怖以外の自己への脅威について検討していない。そのため、本研究の結果が「死の恐怖」が顕現化した時に特有のものであるのかという点については検討されていない。今後は、自尊心への脅威や対人葛藤等、他の脅威が生じた場合との比較検討を行うことが必要である。

引用文献

- Brewer, M. B., & Kramer, R. M. (1986). Choice behavior in social dilemmas: Effects of social identity, group size, and decision framing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 543-549.
- Dechesne, M., Janssen, J., & van Knippenberg, A. (2000). Derogation and distancing as terror management strategies: The moderating role of need for closure and permeability of group boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 813-835.
- De Cremer, D., & Van Vugt, M. (1999). Social identification effects in social dilemmas: A transformation of motives. *European Journal of Social Psychology*, 29, 871 - 893.
- Goldenberg, J. L., McCoy, S. K., Pyszczynski, T., Greenberg, J., & Solomon, S. (2000). The body as a source of self-esteem: The effect of mortality salience on identification with one's body, interest in sex, and appearance monitoring. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 118-130.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of the need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (pp. 189-207). New York: Springer-Verlag
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Simon, L., & Breus, M. J. (1994). The role of consciousness and accessibility of death-related thoughts in mortality salience effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 627-637.
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- Lickel, B., Hamilton, D. L., Wierzchowska, G., Lewis, A., Sherman, S. J., & Uhles, A. N. (2000). Varieties of groups and the perception of group entitativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 223-246.
- 久田満・千田茂博・箕口雅博 (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第 30 回大会論文集, 143-144.
- Nier, J. A., Gaertner, S. L., Dovidio, J. F., Banker, B. S.,

- Ward, C. M., & Rust, M. C. (2001). Changing interracial evaluations and behavior: The effects of a common group identity. *Group Process and Intergroup Relations*, 4, 299-316.
- Rosenblatt, A., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Lyon, D. (1989). Evidence for terror management theory I: The effects of mortality salience on reactions to those who violate or uphold cultural values. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 681-690.
- Tremayne, K., & Curtis, G. J. (2007). Cooperative behaviour in a prisoner's dilemma: A terror management perspective. *Proceedings of the 4th International Biennial SELF research conference: Self-concept, motivation, social and personal identity for the 21st Century*. Ann Arbor, USA.
- Tyler, T. R., & Blader, S. L. (2001). Identity and cooperative behavior in groups. *Group Processes and Intergroup Relations*, 4, 207-226.
- 脇本竜太郎 (2005). 存在脅威管理理論の足跡と展望—文化内差・文化間差を組み込んだ包括的な理論化に向けて— 実験社会心理学研究, 44, 165-179.
- 脇本竜太郎 (2009). 存在論的恐怖が自己卑下的帰属および他者からの支援的帰属の期待に及ぼす影響の検討 実験社会心理学研究, 49, 58-71.
- 山本真也 (2011). 利他・協力のメカニズムと社会の進化 霊長類研究, 27, 95-109.

註

- 1) 本研究は、第一著者が平成28年度に名古屋大学教育学部人間発達科学科に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。
- 2) 本研究の結果の一部は、日本社会心理学会第58回大会において発表された。

Mortality salience and altruistic behavior: Focusing on group identity and group permeability

Kengo FURUHASHI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)
Tasuku IGARASHI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Previous studies have shown that people high in group identity are likely to cooperate with other group members. This study examines if mortality salience increases altruism among those low in group identity in impermeable groups. Results showed that participants low in group identity in the mortality salience condition behaved altruistically when the group permeability was low. Thus, people low in group identity adopt the strategy of being more altruistic only if it is difficult to leave the group. This suggests that when the group is impermeable, people low in group identity have no option but to behave altruistically to justify their cultural world-view in the group due to the difficulty to moving to other group.

Keywords: altruistic behavior, mortality salience, group identity, group permeability.